仔犬が家にやってきた！

どの子が可愛い

大きな子、小さな子、白いの、黒いの、混りっ毛、短毛、長毛、ちぢれっ毛、世の中いろんな犬がいて、それぞれ可愛い目をしてる。

犬をわが家の家族の一員に迎えようと決めたとき、候補にあがった犬種は少なくなかった。できればみーんな欲しい。けれど、そうもいかない。仲間が多いのはよい点も多いけれど、スペースだってそんなにないし、第一、数が増えれば増える程、飼い主の愛情だって分散するわけだから、飼われた方も気の毒だ。ということで、わが家では一頭だけ飼うことにしたから、新しい家族を決定するのには苦労した。いろんな犬について記された本を手当たり次第に調べ、知り合いの獣医さんに相談する。そして、出した結論は、“ラブラドール・レトリーバー”であった。

理由は、まず、平均して頭の良い犬だと聞いたこと、ジャンボ宝くじを買い続けてもついぞ高額賞金に当ったことのないわが家では、ワンちゃんまで外れでは困るのである。次に、性格が温和で人間大好き犬だと聞いたこと。独り孤高を保つという猫的性格も悪くはないが、家族が一緒に行動するのが日常のわが家には向いていない。人の出入りも少ない方ではないから、

中には気に入らないのも必ずいるはずで、噛みつかれても困るのである。次に、地味な風貌。犬の癖に水が大好きとあって、油性の強い毛は艶やかに光ってはいるものの、連れて歩いても知らない人は雑種としか思わない、その癖、性能発揮すれば抜群とくればもう言うことなし。こいつに決まりだ。おまけに、むだ鳴きも遠吠えもまずしないという。なにやら良いことばっかりだ。後は飼い方次第と心を決める。

牡にするか牝にするかも、重要な問題である。多くの経験者の言によっても、人間の子供と同じで男の子は動きも激しく活発だし、女の子は優しい面が目立つという。

大型で、活発で、元気良く転げ回って一緒に遊べる奴が欲しかったのだが、女房殿は優雅に足元に身を寄せる方を望んだ。

「結婚する時も、女の子ならそんなに飛び抜けていなくてもお婿さん探せるけど、男の子だと容姿端麗でチャンピオンの賞歴だとか何だとか持ってないと、なかなかお嫁さんになってくれる娘がいないんじゃないか？」

なんてことも考えあわせて、うちの子は女の子と決定した。チャンピオンに仕立て上げる苦労はいとわないにしても、それでは有名校に入ることを期待されている子供と同じで、犬の方からすれば気の重いことにもなりかねない。

黒い牝のラブラドール・レトリーバーと決めたものの、当時はまだこの犬種を飼っている人

が少なく、ラブラドールのクラブもなかったから探すのが大変であった。普通のペットショップのウインドーに大型犬は並んでいない。

同じラブラドールといっても、顔形から習性まで、いろんなタイプの子がいるわけで、犬の世界だって「蒿が鷹を産む」のはなかなか難しいことだろうから、ある程度は血統も気なってくる。ある動物学者の説によれば、「性格は明確に遺伝する」とのことである。

一度、家族になったからには「選び違えてたから、お前いらないや」とはいえないのだ。少なくとも十五年・・・犬の寿命がそうだとすれば・・・以上は付き合うことになるのである。あの動物愛護にうるさいはずのフランスでさえ、バカンスシーズンの前には、邪魔になる愛犬を捨てていく不届き者が少なくないと新聞が報じていた。例え、どんな鈍犬が来たとしても、人間としてそんな真似は絶対できない。許せない。

お家どうする

「ラブラドールの仔犬は頭が良いだけに悪戯の天才ですよ。お庭の木なんか、ぜーんぶなくなりますよ。」

ラブを家族にと決めたとたんに、獣医さんはわが家の庭に目をやりながら物騒なことをおっゃる。あるラブ君は十米もの大きな木を見事に倒してしまったそうである。わが家の庭には

八米位の辛夷の木が生えている。それが倒されるとちよっと困るが、他には大した木は生えていない。苦労して植えた芝生がちよっぴり惜しい気はするが・・・。

悪戯の時期を過ぎて、できあがった大人のラブを迎えるのも悪くはない。獣医さんは庭の木を例えに出されたけれど、悪戯の天才ってことは・・・庭だけでは済みそうもないってことだろう。

しかし、どうせ家族として迎えるのなら、仔犬の時から育てたい。仔犬の可愛さは庭の雑木に替えがたい。やっぱり何処かでよい子が生まれてくるのを待とう。

その間、こちらはシャベルを握って砂利・砂・コンクリートと奮戦。鉄工所にフエンスを発注して、芝生との間に仕切りを作り、日当たりの良い場所に五坪ほどの仔犬の運動場と水飲み場、排泄物処理用の排水口を、手のひらのいくつかの豆とともに、なんとか作り上げた。本当は五十糎以上もの厚さに、おがくずを敷き固めて、汚れたらそっくり取り替えるのが、仔犬の脚には良いのだそうだけれど、そんな大量のおがくずはどこで手に入れればよいのかもわからないし、敷き替えの手間を考えると、都会の真ん中では無理な話で、気の毒だがコンクリートで我慢して貰うことにした。その代わり日向ぼっこで寝そべるであろう部分には、なるべく大きな絨毯でも敷いてやろう。

新しい家族を迎えるとなると、準備しなければならない物が沢山あるものだ。

運動場はできたけれど、お家はどうしよう。「犬の飼い方」を表題にした本なんかを見ると、いわく、

「夏は風通しが良いように裏窓を設け窓にも出入口にも蚊が入らないように網戸を付けること。また、強い日差しが屋根を直射して室温が上がらないように天井を付けるとか簾か何かで屋根全体が被われるように、冬は逆に冷たい透き間風が吹き込まないように、自動開閉できるドアを付けるとか厚手の垂れ幕を下げるとよいでしょう。小屋の内部に陽が当たらないのは衛生上もよくないから、中まで日差しを受けられるようにする。湿度を防ぐためには地面から相当の高さの床を設けること。掃除をし易いように高さは高くし、室内の広さは犬が手足を充分に伸ばして寝られる広さが最低限必要です。できあがったら中に入って見て下さい。人間が居心地良く思えるものでなければなりません。設置する場所は、なるべく人の居る場所に近いほうがよいでしょう。」

なんて書いてある。全くもっておっしゃる通り。要するに、それは人間の住まいとなんら変わるところがない。そこで、犬小屋を造るのはやめにした。これなら庭に面した家の一隅をもってした方が犬も喜ぶし、小屋を造る手間も省けるというものだ。「家の中が犬臭い」などとぬかす奴はわが家に出入りしていただかなくって結構だ。なんて、多少ならず意固地に構えて実行したが、これは全くの杞憂であった。綺麗好きなラブラドールは，こちらが怠らずに手入れ

をしてやりさえすれば、下手な人間よりは余程臭くなんかなかったのである。

初めまして（仔犬選び）

できれば夏休みが明けて、暑さが和らぎ、寒さが訪れるのにはまだ相当の期間がある頃、チビちゃんを迎えたかったのだが、思い通りの季節には巡り逢うことができなかった。

お願いしてあった獣医さんから「適当な子が生まれたようですよ。」との連絡をいただいたのは、もう秋風が吹き始める九月の末であった。早速、予約の電話を入れる。生まれたばかりの仔犬たちに、外部の者が迂闊に触れては、どんな病原菌を運び込まないとも限らないから、チビちゃんにお目に掛かれるのは一カ月ばかり先になるとのこと、慎重なブリーディングはよいことだ。

初産で、牡五頭、牝四頭の誕生だという。父親も母親も黒毛だから産まれた子供はみんな黒。その中にうちの子になる奴が居るはずなのだ。どんな子なのか心が弾む。

名前は、春から決まっていた。「ノイ」である。「うちノイぬ」だから命名したのだけれど、後で考えてみたら「よそノイぬ」も、ノイになる。

「洋犬だから、英語で何か教えるとしたら、ノーと間違えてかわいそうかなあ？」

「だいじょうぶよ！　頭良いんだから！」

「そうだね、ローマ字で書けばＮＯＩ、ナンバーワンだもんね。」

いよいよその日がやってきた！　十月二十七日の水曜日。秋風が、庭の辛夷の葉を乾いた音を立てて吹き抜ける季節になっていた。ラブラドールに詳しい獣医さん夫妻と待ち合わせて、チビちゃんを見に行く。体型、頭型、脚、目、耳、尻尾、性格・・・などなどなど。もう、数十年も家に犬の居ない生活をしてきた自分ではどれを選んでよいのか自信がなかった。女房殿と二人だけで選んだとすれば、きっと可愛らしい顔付きで一番最初に駆け寄って来た子を選んだことだろう。運命の厳粛な一瞬はいたる所に転がっているものなのだから・・・。繁殖者に信頼が置けるのであれば、もちろん、その程度の選択で充分なのであろうけれど、犬を飼うことにした最初から、恐らく最期の死に水を取っていただくまで、ご面倒を掛けることになるであろう獣医さんに、迷うところは総てをお任せすることにした。

庭先の陽だまりに、組み立て式の六面フェンスに囲われて、九頭のチビどもは群れていた。

「わあ！　可愛いい！」

清らかに澄んだ目、ちょこちょこ動く可愛らしい脚、小さな尻尾と、ちょこんと付いた耳・・・どれでもいいや！

サークルの外から、獣医さんはまるで猫の子を掴み上げる手つきで、器用に一番大きな子の首筋を掴んで持ち上げた。キャンとも言わず、ばたつきもしないのは性格も大らかなのが多い

そうだが、これは男の子であった。

瞳の色彩、歯の噛合わせ、四肢の具合から全体のバランス、胸の厚さ、くるぶしから掌、指の具合、耳の穴からお尻まで覗いて、獣医さんは最終的に、どっしりと体格の良い女の子に白羽の矢を立てた。当方に異存はない。この子に決まりだ。

「初めましてノイちゃん！　よろしくね！」

「あらあら、汚れますよ。あんよもお尻も泥んこだから。」

といわれた時にはもう遅かった。女房殿も小生もトレーナーの胸元は泥だらけ。だが、小さな尻尾を一心に振り動かすチビすけは、そんな汚れがちっとも気にならないほど可愛い奴だった。抱き上げて顔を近付けると、仔犬特有の甘ったるい香りが漂う。もう、すぐにでも連れて帰りたい。

「それでは親元から離せる六十日になる迄、大事にお預かりしますので。」

という繁殖者の言葉に従って、養子縁組の手続きを終え、帰っては来たものの、日が経つにつれて、うちの子が置かれている環境に気になる点がいくつか生じてきた。

一つは、その時は何気なく見ていたのだが、繁殖者の家に多種類の動物が雑居し過ぎているのではないかという点であった。そこには覚えているだけでも、ラブラドールのお母さんと九頭のチビちゃんの他に、シェパードが三頭、何だか知らない洋猫、インコ、その他の鳥たち

と、種類の多さはちょっとしたペットショップなみであったこと。

二つには、お母さんの入れられていた小屋がいかにもみすぼらしく、「手足を伸ばして・・・」どころか、寝られるのかなと心配になるほどの広さしかなく、しかも、陽の当たりそうもない場所に設けられていたこと。

三つには、「こうやってフェンスで囲って、いつも仔犬たちに日光浴させてるんですよ。」という場所が泥んこだったことである。

他の動物に触れる機会が多いということは、抵抗力の弱い仔犬にとって、こわい病気に感染する機会が多いことになるし、むき出しの地面の上で転げ回って遊ぶことも、その危険性を増やす。さまざまな寄生虫に取り付かれる可能性だって大きくなる。現に、繁殖者は、

「前にシェパードの子を四十五日で譲ったところ、貰われて行ってすぐに病気になってトラブルが生じたので、うちでは　六十日過ぎてから引き取っていただくことにしました。」

と言っていた。

母親がいろいろな予防注射を受けていて、仔犬たちが母乳を通じて譲り受けた移行抗体を持っている間はよいけれど、数週間の間に免疫は次々と切れてゆく。いわゆる魔の五十日である。この時期に仔犬たちはジステンパーやパルボ腸炎など、少なくとも四種類から七種類ほどの予防接種を受ける必要がある。数回に渡るこの注射を終えた後でも、仔犬たちの体内に抗体

が完全にできるまでの二週間は、危険を避けるために外に連れ出してはいけないというのが常識だ。

さあ、そう思い始めると心配で落ち着かない。早くチビすけノイと暮らしたい気持ちも手伝って、獣医さんに指示を仰ぐ。

「四十五日を過ぎたら親元を離れても大丈夫でしょう。予防接種その他は引き取ってからやりましょう。」

ということになった。

「獣医さんがそうおっしゃるのならかまいませんが、何があってもうちでは責任持てませんよ。」

繁殖者は、前のトラブルによほど懲りているのであろう。何度も念を押されて、ノイを引き取る日は、産まれてから四十六日目の十一月六日の土曜日と決まった。またまた獣医さんご夫妻にご足労をお願いして立ち会っていただく。

ノイは、うちの名前を書かれた白いリボンを首に巻かれ、他のチビどもから離されて、一匹だけ家の中にいた。

われわれを見つけると、すっ飛んで来て尻尾を振る。未だできていないという血統書は、後で送って貰うことにして、その他の手続きを済ませ、晴れてノイはうちの子になった。

ノイにとっては、生まれて初めてのドライブである。混んでさえいなければ一時間ちょっとの距離だけれど、悪酔いするとかわいそうということで、獣医さんに車酔い防止の鎮静剤を飲ませて貰う。ノイは嫌がりもしないで飲み下した。

助手席の女房殿の膝の上で、毛布にくるまったノイは、女房殿の腕を両手で確りと押さえ、おとなしくその儘の格好で眠り続け、薬のお陰か、酔って戻したりすることもなくわが家に到着した。

頑張りノイすけ（生活の基本）

「汚れがひどいようですから、ノイちゃん、お風呂に入りま　しょうか。」

と、獣医さんの奥様が、お風呂の使わせ方を模範演技で示してくださる。

頭から洗っていくのは、もしも蚤などが付いた時、身体から洗い始めると蚤は頭の方に逃げ込んでしまうから。

ぬるま湯で最初水洗いするのは、人間の髪洗いと同じこと。

シャンプーはしゃれた香料入りなんかではなく、ちょっと硫黄臭くて高価だけれど、セリーングリーンが洗浄効果とともに、ふけを落とし、皮膚病の予防効果も期待できる、現在のところ良いと思われる洗剤であること。

脚の付け根、脛の骨に添って凹んだ所、足の裏の切れ込み、お尻の辺りなどは、特に丁寧に洗ってやる必要があること。

あまり頻繁に入浴させ過ぎてもいけないけれど、ラブラドールは、週に一度は洗ってやるのがよいこと。入浴後は水気をよく拭き取ってやること・・・などなどなど。

その手際のよさとともに教えられた点の多い実習であった。

入浴の後、女房殿の腕の中で眠ってしまったノイを、そっとクッションの上に移す。

「さすがラブですね！　のんびりしてる。他の犬だと目を覚ましてしまいますよ。」

獣医さんの奥様の最初の批評である。

与えられたクッションの上でひと寝入りしたノイは、元気よく起きだして辺りを見回し、女房殿にまとわり付いて尻尾を振る。環境の変化を気にする風はまったくない。まるで「ここで生まれました」という顔付きで、憶することなく、手当たり次第に辺りの家具に取り付いて噛み始めた。しかし、自分を抱いて来てくれたこの人は一番頼りになる奴だと決めたのか、女房殿の動きを追う目つきは真剣そのものである。だが、その間も噛み付き運動の方は休もうとしないから、たまらない。たちまちのうちにテレビの台が、うっかりしているうちに、敷居の一部が、ノイの歯形で刻まれた。

納得、これなら十米の庭木もすぐ倒せる。

「お母さんの匂いを付けたタオルですから、これを敷いてやると落ち着くでしょう。」と言って、繁殖者が渡してくれたタオルには目もくれず、立てばスカート、座れば袖口を両手で押さえ込んで、好き好き好きとばかりに噛み回る。これは愛情表現でもあり、成犬になってもやるけれど、おとなになるとちゃんと力具合を加減するし、やり方も変わってくる。しかし、仔犬の時はそうはいかない。指にはときとして凶器に変身する真っ黒な爪を持ち、小さくて可愛い口には、これまたちっちゃくて可愛らしいけれど、しっかりとした前歯が綺麗に生え揃っているからたまらない。以来、わが家の普段着は作業着まがいのぼろになった。

仔犬には、して良いことと悪いことをしっかり教えなければいけない。これは人間の子供の場合と同じである。犬に合わせて生活してはいけない。そうした生活は長続きせずに途中できっと投げ出したくなるに決まっている。これから永い年月をともに楽しく暮らすために、自分たちの生活の基本を変えることなく、それに添って、誉めと叱りを上手に使って教育する。まだチビだからかわいそうとか、分からないだろうと思って、そのけじめを教えてやらない方が仔犬にとってはよほどかわいそうだし、人間にも困った状態を引き起こす。仔犬の頭脳の発達は、予想以上のものがある。時には、そんなことまで分かっているのかと舌を捲くことがある。

ラブラドールは誉められるのが大好きだ。何かを教えようと思ったら、七っ誉めて、三っ叱

りながら教えるのが良いようだ。偶然も利用する。

誉めるときは、心のそこから一緒に喜んで誉めてやること。口先だけの誉め言葉はなんの役にもたたない。

叱るときも同じだ。もし、叩くにしても、頭やお尻を叩いてもほとんどきかない。おとなになって、それが相手の怒りの表現なのだなと理解するようになってからは別だけれど、仔犬のうちは、へたをすると、それも遊びのうちに取り入れられてしまう。例えば、食卓の上に顔を突き出してきて困る場合ならば、平手でばしっと鼻先を叩く。袖口を噛んで困る場合には、空いている方の手の人差し指で口吻の横をぱちんと弾いてやる。もちろん、いずれの場合にも「だめ！」とか「いけない！」とか「ノー！」とか、はっきりと、それがしてはいけないことなのだと、分かる言葉を添えて叱る必要がある。

しかし、ラブラドールは、肉体的苦痛によってなにかを思いとどまるタイプではないようで、「お座り」を覚える頃になると、むしろ口でお説教を垂れた方が、より効き目があるようだ。

「向かい合うように座らせて、目を見つめ、暫くお小言をいってやると、なるべくこちらと目が会わないようにしながら　聞いているけれど、効き目あるみたいよ。言うことがなくなっちゃうと、後はただブツブツブツブツって言ってるだけなんだけど。」

という、先輩の言に従ってみたところ、確かにこれは有効であった。耳をぺったりと後ろに引き、次第に頭を垂れて明らかに恐縮の意を表する。

人間に対してだって同じだけれど、完全に落ち込ませてしまわないように、ひねくれたり、おずおずした犬にさせないようにと、とかく叱り方のテクニックは難しいものである。

どこからどこまでは良くて、どこからはいけないとするか、しっかりこちらが考えてから、叱ることを決める必要がある。ある時は良くて、ある時はそれを叱る、というような叱り方は、犬を混乱に陥らせるだけなのだ。

ノイが仔犬であった頃を振り返ってみると、わが家は相当のスパルタ教育であった。これは、わが家はというよりは、女房殿はといった方が正確で、獣医さんから、末長くノイと楽しく暮らすためには、「これこれだけは」と言われたことを、きちんと守らなければ気の済まない女房殿は、ときには涙を浮かべながらお説教を垂れていたが、可愛がる方も真剣であったせいか、ノイは、叱ってくれる女房殿を一番慕っていた。

女房殿はまた、なんでもノイに懲りずに根気良く教え込んだ。

「ね！　綺麗でしょう！　これ、お花っていうのよ！　ほうら、匂い嗅いでごらんなさい。良い匂いでしょう！」

そんなこと分かるだろうかと思うようなことまで教えている。ノイが、それを良い匂いと感じ

ているかどうか分からないが、最初は観葉植物の葉っぱを噛み散らかしていた奴が、薔薇やシクラメンに顔を近付けて、香りを楽しんでででもいるかのごとき様子を見ると、教えて無駄に終わることはないような気がする。独りで留守番をさせられている時でも、観葉植物や庭の草花を引きちぎったりしなくなったのはいうまでもない。

女房殿に較べて、小生のほうはルール破りの甘やかしが多かったから、それは、叱られた時の精神的な逃げ場になっていたのかも知れないが、ノイはひねくれることもなく、すぐにわが家の生活のリズムに慣れ、躾の苦労は楽しみに変わった。

ラブラドールが盲導犬に適していることの一因は、躾られたことをぎりぎりまで守ろうとする性質を、あきれるほど強く持っていることであろう。

わが家の日常生活の場は、二階になっている。ノイは家に来てからすぐに、チビにしてみれば一段一段が身の丈ほどもある急な階段を、一気に昇り降りする術を身に付けた。誰かの足音が玄関に近づく気配を敏感に察知して、黒い稲妻は階段を駆け降りる。どなたかお見えになった時、下の部屋にお通しすることが多いから、ノイがいちいち玄関口に顔を出されたのでは困るのである。

女房殿は「降りていいわよ。」と言うまでは、勝手に階段を降りないように教え込んだ。ところで、その女房殿が下の部屋で呑んでいた客の席についい加わってしまい、二階の台所で揚げ

物をしていたガスの火を迂闊にも消し忘れ、鍋に火が入って危うく火事になりかけたことがあった。その時、まだ子犬だったノイは二階にいたのだが、真っ黒な煙が二階の部屋に充満し、身を伏せたノイの頭すれすれにまで迫った中で、階段に前足を掛け途方に暮れたような顔をしながらも、降りて来ようとはしなかったのである。この時は大事に至らず、家もノイも無事だったけれど、

「今度こんなことがあったら、降りて逃げていいからね！　真っ先に逃げ出すのよ！」

と教え直した効果のほどは、幸い、「こんなこと」が再び起こっていないから不明である。

入れること　出すこと

獣医さんの立ててくれたメニューの食事が、ノイは大変気に入ったようである。それは、サイエンスの幼犬用ドッグフード（体重一キロに対して一日につき三十グラム。ノイは家に来た時四・二五キロ、最初は一日五回の食事にしたから、一回分は二五・五グラム）に、デビフの黒缶茶さじ一杯を加え、犬用の粉ミルクを糊状に溶いてまぶしただけのものだが、毎回、待ちかねたようにぺろりと平らげて、もっと欲しそうな顔をする。これだけ食欲旺盛ならば、と獣医さんに太鼓判を押されたのはよかったけれど、食べ終わったとたんにもう次の食事のことが頭から離れないらしい。食べ物がどこに入っているか、それを取り出す時にどんな音がするのか、コンピ

ユーター顔負けで、たちどころに記憶されるらしく、誰かがそれに触れようものなら、サークルから出して貰って膝の上で遊んでいる時でも、ちょっと首を傾げ、小さな耳をぴくぴくっと動かすと同時に、姿は台所の前にワープする。

仔犬の間は特に間食を避け、適量の良質なドッグフードを食べさせることが大切である。仔犬のおねだりに負けて、人間用の油性の強いスナック類などを与えることは厳禁である。最初からそんなことをしなければおねだりなどしない。今でこそ、わが家ではだいぶだらしなくなってしまったが、成長期には全く人間の食べ物を与えなかった。ノイの方も、それは自分の食べ物ではないと思っていたようだ。他のものでお腹が満たされた仔犬は、必然的にドッグフードを食べなくなる。それは、仔犬の発育のバランスを崩し、可愛い仔犬を徐々に死に追いやることに他ならない。どうしても与えるのであれば、糖分・塩分・脂肪分・ビタミンなどに気を配って調製された、犬用のおやつを用意しておくことである。

ノイは、果物も野菜も大好きだ。バナナやネギの類は犬には悪いそうだが、知らずに与えたバナナは自分から吐き出した。蜜柑・林檎・柿・梨・桃・葡萄・苺・西瓜・メロン・大根・キャベツ・白菜・サラダ菜・レタスと与えればなんでも生でバリバリ食べる。繊維質の食べ物は犬にも必要なのだが、果物の糖度はとても高いから、与え過ぎには御用心である。幸い、ノイは「ご飯食べたくなーい」なんて言葉とは無縁に成長したが、一時期は背中が平らに見える

ほどのデブになった。これは牛骨の与え過ぎで、カルシュウム豊富で良いように見える牛骨には、髄の部分に脂肪分が多いという落とし穴がある。とにかくラブラドールは、口から入れることが大好きだ。

最初の計画では、ノイのために造ったコンクリート敷きのスペースに面した、洗面室の一隅を犬小屋代わりにする予定だったのだが、これから冬に向かって日増しに寒さがつのる今となっては、風邪を引かれても困るし、目も届きにくいということで予定変更。二階の居間の一隅に、絨毯が汚されないように厚手のビニタイルを一畳分位敷いて、六面フェンスで囲い、組み立て式のケイジにベットカバーを掛け、中に毛布とクッションを置いて寝場所とし、ケイジに付いていたトレイを引き出して古新聞を敷いてトイレに充てた。こちらの目から見れば、その一隅は落ち着いて居心地も良いし、我々の姿も目で追えるはずなのだが、ノイは、のんびりそこで昼寝を楽しんで居てはくれなかった。

「わたしだけこんな囲いの中に入れとくのは不当だわ！　さっさと出してよ！」

と言わんばかりに、人の姿を見れば全身全霊を込めて、フェンスにどすんどすんと懲りることなく体当たり、その根気のよさにはほとほと感心させられたが、おしっこは所定の場所でやってくれないし、飲み水はひっくり返すしで、その我武者羅振りが落ち着くまでの二か月間は全く大変であった。人がいる間はそれでもまだ良いのだが、誰もいなくなって、孤独を感じると

物を噛みたくなるものなのか、手当たり次第に咬み破る。お得意の体当たりでフェンスをずらして、床に敷いたビニタイルの端に到達しては、生え替わり前の小さな歯の癖に、五ミリ位は厚みのあるビニタイルを、苦もなくぼろぼろにしてしまう。与えられた、ふわふわのクッションが大好きな癖に、帰ってくるとパンヤが部屋中に舞っている、といった有様であった。幸い、ノイは垂直壁登りだけはやらなかったから、勝手にサークルから脱出することはなかったけれど、中にはそんな妙技を持った子もいるようである。

今にして思えば、この点で、意識が芽生え始めたときから、人間との共同生活を知りうる環境にあった子と、そうでない子との違いは、驚くほど大きいものがあるようだ。というのは、後に、この我武者羅ノイすけも、子どもを産んだのだけれど、その気質を遺伝しているはずのチビどもの行動が、あまりにもノイと違い過ぎていたのである。

ノイの子供たちは、五十日もした頃には、サークルの中でちょこんとお座りをしたり寝そべったりしながら、われわれの動きをじっと目で追っており、構ってくれそうだなと分かるまでは、鳴き騒ぐこともしなかった。敷いてやった布団から綿を引っ張り出したり、ベットの裾を咬んだりはしたけれど、サークルから解放されても、勝手に本棚から面白そうな本を引っ張り出して咬み破ることもしなかった。われわれのベットに上げてやると、べたっと腹ばいになって一緒にテレビを見ていたし、催してくれば、独りでサークルの中に置いたトイレに出掛

けて行った。入浴もまた同じであった。ノイの子供たちは、頭からシャワーをじゃんじゃん掛けて洗っても、

「あら、面白いわ！　もっとやって！」

といった顔をしている。ノイすけは、水辺に連れていくと、どんなに深い所でも、流れの速い所でも、大喜びで飛び込んで顔を濡らす癖に、シャワーが顔に掛かると風呂中をうろうろ逃げ回る。生まれてからわが家に来るまでに、入浴の経験がなかったか、風呂に対するよほど悪い思い出があったせいだろう。だから、仔犬を入浴させるのが、こんなに簡単なことであったのかと知ったのは、ずっと後のことであった。

これからの永い幸福を考えて、ノイが鳴こうが騒ごうが、決めた時間は自分の居住区に居ることを義務付けたが、許された時間はサークルを解放して、自由に家中を歩き回らせた。といっても人間大好きなラブラドールは、まるで金魚のなんとかよろしく、女房殿か小生のお尻にひっついて歩くだけで、自分だけ、誰もいない部屋に行こうとはしなかった。われわれが床に座れば喜んで膝によじ登り、椅子に座れば自分も椅子に登りたがる程度で、生活に慣れてくるに従って、邪魔になることはなくなったから、サークルを開けておく時間は次第に永くなった。またすぐに出して貰えると分かって、「お入り」に、素直に従うようになった頃には、サークルの存在が無用になった。　独り留守番をさせると、いろいろの物に歯形を付けてくれ

たけれど、考えてみればそれらは、ティツシュの箱であったり、石鹸であったり、私が日曜大工でこしらえたテレビの台であったりと、いずれもどうでもよいような粗末な物ばかりで、買い替えを覚悟していた皮張りのソファーなどの被害は皆無であった。ノイが居る所で、数百万円の段通の絨毯をめちゃめちゃにして養子に出された、かわいそうなラブラドールの話をしたことがあったから、敵はわが家の懐具合を計算していたのかも知れない。とにかく、ラブラドールは大好きな人間から離されてケージに入れられるのが大嫌いだ。

現在では、ノイがまるで家主のような顔をして、ふたりと一緒に暮らしているけれど、楽しいことばかりで困ることは一つもない。

「お風呂にしょうか。」と問いかければわれ先にすっ飛んで行くし、シャワーも身体にかける分には良い気持ちそうにしている。せいぜい顔を洗う時に、「お鼻にお水が入らないようにしてよ！」程度の忌避で済むようになった。

イギリス人が、「日本人には犬を譲りたくない」という大きな理由が、「日本人は犬を家の中に入れないからだ。」と聞いたけれど、家の中でラブラドールと暮らしてみると、イギリス人の言うことがよく分かる。生活習慣が違うから、なかなか難しい点も多いけれど、ラブラドールは、常時、人間と一緒にいられる状態で飼うべき犬であろう。

出す方の躾は、敵が食いしん坊なのを最初は利用した。匂い付けのつもりかどうか、あちら

こちらの絨毯を汚していた頃、トレイに敷いて準備してある古新聞の上でやった時には、大いに誉めると同時に、小さなビスケットとか犬用のジャーキーなどの一かけらを与えた。間もなく、それ欲しさに出ないところを無理して一滴搾り出しては、

「ね！　やったよ、やったよ。あれ、頂戴！」

となって、トイレの躾は解決した。

成長するにつれて量も多くなり、古新聞の始末にも飽きてきた。工務店の社長を呼んで、真剣に犬用の水洗トイレを考え始めた頃、散歩に出て広々したところで清々と用を足すことに快感を覚えるようになったのか、庭に出て斜面を利用すれば足を濡らさずに済ませられると知ったためか、催してくると鼻先で誰かを突っついて「庭に出してよ。」と誘導するようになった。排水口にそれらを流し、再び家の中に戻る時に、いちいち足を拭いてやる手間は生じたものの、居間からトレイが消え、古新聞の確保と始末、そして、懐は犬用水洗トイレ設置のための多大な出費から解放された。感心させられたのは、それについてこちらがなにも注文を出したわけでもないのに、ノイが排泄の定位置を、排水口に向かってコンクリートの傾斜が一番急で流し易い場所に、決めてくれたことである。後にノイの子供をお譲りした方が、

「うちの子はあんまりお利口なんで、東大出の生まれ変わりだって言ってるんですよ！」

と、おっしゃっていたけれど、ラブラドールと暮らしてみると感心させられることが驚くほど

多いのである。